

どぶろく白馬～酒井明 説話集 10※～

どぶろく。という言葉も古い言葉になってきた様なが、年配の人にとっちゃあなつかしい言葉じゃろう。子どもたちの中にやあ、「どぶろくいうたらどんなもんぜえ」と問う子もある。

許可なしで作る密造酒。こわいお役人が調べに来る。所によっちゃあ白馬で村中走りまわる。調べに来ちよるぞと言うて廻るよりそれが早い。

そんなことから、どぶろく変じて白馬と呼ばれる。

こんな話も残っている。

おじいのだれすけが、なにもお役人の目を盗んで作りとうはのうても、毎晩酒屋まで買いにゆく金のゆとりもないままに、シダわぐろの中に埋め込んだ、つぼの中にせいぜい一杯作り込む。

山仕事の若い衆や、山芋掘りやら猟師たち、これもどうして油断できん。そろそろ呑みごろになると、晩々おじいが汲みに行く。ふみつけ道ができてくる。

「おい、どうもこの道おかしいぞ」

蛇の道は蛇で見つかってしまう。一杯好きな者たちならどうしてなかなかただではおかん。弁当箱のふたが早速茶碗代わりで、昼飯前の一杯となる。

猟師たちも、その日はとうとうその場で暮れて、鉄砲はしもうたまんまでもんて来たという手合もおる。

おじいもおばあも、はらはらしよるが文句も言えん。

「おじいここにや、どぶろく作っちゃる」

言われたら罰金とられて怒られる。それより黙って呑んでもろうた方がまし、ということになる。

年寄りが集まると、呑まれた話や呑んだ話に花が咲く。

白馬は米で作るが、ホケなら芋で作れる、と安あがりなホケ全盛の時代もあったが、それも今じゃあ昔語りいうてもよかろう。

山歩きの最中に、どこからともものう漂うてくる、ホケの香りも今では到底嗅ぐことはできんが、それだけ贅沢なご時世になった。

有難いことよのうし。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。

